

一八九二年「イギリスにおける労働者階級の状態」ドイツ語版への序言より 一八九二・七・二一

一八四七年の恐慌後の景気の回復は、新しい工業時代の夜明けであった。穀物の撤廃と、そのことから必然的に生じたその後の財政改革は、イギリスの工業と商業に、その願ってもやまなかつたあらゆる活動の余地をつくりだした。それにすぐついで、カリフォルニアとオーストラリアの金鉱が発見された。統房地市場は、イギリスの工業製品にたいする吸収力を、うなぎのぼりにたかめていった。しかし、こういったすべてのことに、さらにつぎのような事情がくわわった。

それは、前時代のおわりに採用された新しい交通手段——鉄道と大洋航路の汽船——が、いまでは国際的な規模で実用化され、それによって、それまではただ萌芽としてしか存在しなかつたもの、すなわち世界市場を実際につくりだした、ということである。この世界市場は、当時はまだ一つの大きな工業中心地、つまりイギリスのまわりにならがる多数の、主として、あるいはもっぱら農業をいとなむ諸国からなりたっていた。イギリスは、これらの国々の過剰な原料の大部分を消費し、そのかわりに工業製品にたいするこれらの国の需要の大部分を供給していた。したがって、イギリスの工業の進歩が巨大であり、未曾有のものであったこと、またそれが非常に巨大で未曾有な進歩だったので、一八四四年の状態など、いまのわれわれにとつては、比較的安全性がなかなもの、ほとんど森林居住時代のように原始的にみえるのは、すこしも不思議ではない。

こうして、トラック・システムは工業地区が消滅した。土間労働法や一連の小改革が、すべて議會を通過した——これらすべてのものは、自由貿易と無制限競争の精神に真正面からさらうものであったが、同じ程度に、もっと不利な条件にあるその同業者にたいする巨大資本家の競争を、さらにいっそう優勢にしたのであった。

それだけではない。工事の設備が大規模になればなるほど、またその労働者が多数になればなるほど、それだけ労働者との衝突のたびに生じる損害と事業場の煩瑣が、いっそう大きくなる。だから時がたつにつれて、工場主、とくに巨大工場主の頭に新しい精神が生まれてきた。彼らは不必要な争いをさげ、労働組合の存在と力に満足し、ついにはストライキのうちにさえ——ちよようにまいるときにはじめられた場合にかぎるが——工場主自身の目的を達成するための有効な手段を学びをとるようになった。こうして、以前は労働者階級にたいする闘争では軍司令官であった最大の工場主たちが、いまでは平和と融和を呼びかける第一人者になった。しかもこれは、きわめてもつともな理由からであった。

また労働者階級はどうなるのか？ もしも一八四八年から一八六八年までの商業および工業の未曾布の拡大のもとでさえ、労働者は、このように貧困を体験しなければならなかったとすれば、もしもその当時でさえ労働者の大多数は、せいぜいこのろその状態の一次的な改善を経験しただけで、一方わずかばかりの特権的な、保護された少数者だけが持続的な利益をうけたにすぎなかつたとしたら、もしもこのかがやかしい時期が最後の終りをとつてしまつたら、もしも現在のにおもくもくしい停滞がなおいつそうよまるだけでなく、もしもこのつよまつた致命的な沈滞状態がイギリス工業の持続的な、正常な状態になるとすれば、いったい労働者階級はどうなるのであろうか？

真相はこうである。イギリスの工業独占がつづいてきたあいだは、イギリスの労働者階級は、ある程度まで、この独占の利益にあずかっていた。この利益は、彼らのあいだにきわめて不平等に分割されていた。特権的な少数者がその最大の部分をふところにいれていた。でも、大多数の労働者でさえ、すくなくともときどきは、一時的にその分けまえにありついていた。そしてこれこそ、オーエン主義の死滅以来、イギリスに社会主義が存在しなかつた理由なのである。

独占の崩壊につれて、イギリスの労働者階級はこの特権的地位を失うのである。将来いつの日にか、彼らはおしなべて——特権的・指導的少数者もふくめて——外国の労働者と同じ水準にひきおろされたいことに気づくであろう。そしてこれこそ、イギリスにふたたび社会主義が存在するようになる理由なのである。」

「二二まで。が一八八五年の論文である。一八九二年一月一日づけのイギリス版の序文に、そのさい私はつぎのようにつけたした。「一八八五年に、私にみえたままの事態をしるしたこの叙述にたいして、私がつくくわえることはごくわずかしかない。いまでは、『ほんとうにふたたびイギリスに社会主義が存在する』こと、しかも大量の社会主義が、すなわち意識的的社会主義と無意識的的社会主義、散文酌社会主義と詩的的社会主義、労働者階級の社会主義と中間階級の社会主義というように、あらゆる種類の社会主義が存在することは、いうまでもない。」

それだけではない。コレラ、チフス、天然痘、その他の伝染病のたびかさなる襲来は、イギリスのブルジョアにたいして、もしも自分が家族とともにこれらの疫病の犠牲となつてたおれたくないならば、自分の都市を健康的にすることが緊急の必要事であると救えこんだ。そのために、本書に書かれているような極端な弊害は、いまではとりのぞかれていくか、またはたしかにそれはどめだたないようになつていく。下水渠は建設されるか、あるいは改良され、「貧民街」のうちでもいちばんひどい貧民街の多くをよこぎって、幅のひちい街路の列がくくられた。「小アイルランド」は消滅し、「セヴン・ダイアルズ」がこれ

つぎになくなる番である。しかし、それはいったいどういう意味でおろうか？ 私が、一八四四年にはまだほとんど牧歌的である、とするすことのできた全地域が、いまでは都市の膨張につれて、貧民街と同じような腐敗した、住居に適さない、悲惨な状態におちこんでいる。豚や廃物の山は、もちろんもう許されぬ。ブルジョアジーは、労働者階級の不幸をかくす技術ではさらに進歩した。けれども、労働者宅についてはすこしも本質的な進歩が生じていないことは、一八八五年の「貧民の住宅にかんする勅命委員会の調査報告が十分に証明している。そして、その他の全ての点についても、これと同じことである。」

フランス、ドイツ、およびとりわけアメリカは、私が一八四四年に予見したように、おそるべき競争者となつて、ますますイギリスの工業上の独占をうちやぶつた。これらの国々の工業は、イギリスの工業にくらべて若い、イギリスの工業よりもはるかに大きな速度で成長しており、いまでは、一八四四年にイギリスの工業がたつていたのとほとんど同じ発展段階に到達している。あめりかに関しては、この対比はことに著しい。勿論アメリカの労働者階級の外鉱夫たちの反抗をくじこうとする企ても同じである。

私はこのドイツ語版でも、英語版でも、本書をいまの事一態にあわせようとは、つまり一八四四年以降におこつた変化をいちいち数あげとはしなかつた。すなわち、つぎの二つの理由からである。第一に、もしそうすれば、私は本書の大きさを二倍にしなけれはならなかつたであろう。そして第二に、マルクスの『資本論』第一巻が、一八六五年ごろの時代、つまりイギリスの工業的繁栄がその絶頂に達した時代の、イギリスの労働者階級の状態をくわしく叙述している。したがって私は、マルクスによつて述べられていることを、くりかえさなければならなかつたであろう。

一八四四年には、近代的な国際的社會主義はまだ存在していなかつた。それはその後、とりわけ、そして一ほとんどもつぱら、マルクスの業績によつて一つの科学にまで完成されたのである。私の書物は、国際的社會主義の——井的な発展段階の一つを代表するにすぎない。